

---

# マジックワールド。魔法の世界へようこそ

ケン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

### 【Nコード】

N7088Y

### 【作者名】

ケン

### 【あらすじ】

これは突然、魔法の世界に来てしまった少年、如月集の波乱万丈な物語である。

## プロローグ

「は、最悪。理科の点数が50点ってやばいな」

一人の学生服を着た少年が悲壮感を漂わせながら家路を歩いていた。

彼の名は如月 集

とある高校に通う高校一年生である。

ちなみに今日は考查返却日であり

全教科が帰ってくるという日であった。

「は、余裕ぶっこいてたらまさかの計算ミスで

10点落とすし数？も計算ミスで10点落とすし、最悪」

しかし少年の顔はそんなに気にしていなような顔だった。

「ま、いつか。興味無いし」

この少年はある出来事により物事全てに関心が

薄いため、気分で物事をこなし、

勉強も良い点を、取ったら親が喜ぶので

頑張っていた。

とは言ってももうその親も去年に事故死した。

「………帰る」

「……相変わらず静かな部屋」

集はドアをくぐりブレザーを椅子にかけて制服のままベッドに横たわった。

集の家はとても人が住めるような部屋ではなかった。

壁はシミだらけで元々の色が何色なのかも、

分からないほど汚れており畳も同じく。

さらに風呂はシャワーだけという部屋だった。  
なぜ、こんな部屋に住んでいるかというと、

この部屋の家賃はかなり安く破格だった為だった。

しかし、借りた人は全員1か月も経たずに引っ越したという  
曰くつきの一室だったが集はあまり

そんな事を気にも留めない性格なので借りていた。

へはへ面白くないな。今の世の中。何かいいこと無いもんかな。  
いや、それよりも今の生活は普通すぎるから刺激がほしいな。

例えば……このまま寝て起きたら別の世界に  
いたりとか！良いな、それ！……そんな小説みたいな話  
ないよな。寝よ寝よ

集はそのまま目を閉じ10分後には熟睡してしまった。

自分の思っていたことが現実になるとも知らずに。

## プロローグ（後書き）

こんばんわ。初めまして。ケンと申します。

一次創作を書くのは初めてです。

今まで二次創作をやってきましたので。

これから、よろしくお願いいたします。

## 第1話 目が覚めたら魔法の世界！？

「ん？今何時だ？」

集は時計を探そうと手を動かすがその時計が見当たらなかった。

「ん？この感触・・・草？」

不思議に思い目を開けると・・・

「な、何ここ」

周りは草ばかりで集の部屋ではなかった。

「ここどこ？・・・ま、いつか。

興味無いしな。一回散策するかな」

集は一旦、周りを散策する事にした。

「何もねえな」

散策してみたがあまり情報は得られなかった。

すると後ろに何かの気配がして振り向いてみると

「・・・・・・・・」

よく絶世の美少女を見ると目が離せないと

クラスメイトが言っていたがその事がようやく

分かった。その姿は赤い服に黒いマントを

はおり腰には刀を差しており

髪の毛は肩にピッタリと切りそれられていて

なお且つきれいな黒髪だった。

「あ、あの少女」

集が言いかけた時突然、その少女は刀を抜き

切りかかって来た。

「ひっ！」

集は慌てて横に避けるとその刀は切り返され  
首に向かってきた。

「うわああああ!!」

集は恐怖のあまり腰を抜かしてへたり込んでしまった。

そのお陰で何とか刀は髪の毛を少し掠るぐらいで避けた。

「!!!!!!」

その少女は驚いたような顔をしたがすぐさま

冷静になり集に向けて刀を振り下ろそうとするが

「.....」

集と目が合い数秒固まった後に刀を下ろした。

「は、はは。よ、良かった」

「すまない。どうやら君は違ったようだ」

「え、何が？」

「いや何も無い。立てるか？」

「ん〜無理ですね。手を貸してくれませんか？」

「ああ、良いとも」

「すみません」

集が少女の手に触れた瞬間、集の頭に映像がよぎった。

『.....か?』

『.....さ.....ず.....る』

ひな、何これ?何で女の子が泣いてる?

何でそんなに悲しそうな顔をしてるんだ!〜

その映像は画質が粗く音も

割れすぎていてほとんど聞こえなかった。

「大丈夫か？」

「え?あれ？」

先程の映像が急に消え普通の景色に戻った。

「あ、ああ大丈夫です」

「そうか、すまないな。急に襲ったりして」  
「い、いえ別にそんな」  
「所で君はどここの者だい？あまり見ない顔だが」  
「へ？どこって日本人ですけど」  
「ニホンジン？そんな国あったか？」  
「は？いや日本ですよ？日本」  
「何を言ってるんだ君は？ニホンジンだとかニホン  
だとか不思議な言葉を使っているが」  
「す、すみませんがここはどこで、何て言う場所ですか？」  
「何を言ってるんだ？ここはユートリスで  
この地域一帯はコラリスではないか。  
本当に大丈夫か？」  
集は困惑していた。何せ聞いたこともない地名が出ていたのである。  
「ユートリス？コラリス？何じゃそりゃ。……」  
ま、いつか。向こうの世界も飽き飽きしてきたし。  
「ここは受け入れるか」  
「す、すみません。最近ここに来たもので」  
「ふむ、そうか……。所で名は？」  
「ああ、そうでしたね。僕の名は  
如月集つて言います。貴方は？」  
「私は桜ゆえだ。よろしく頼む」  
「はい！」  
お互いに握手を交わした。  
「ひとますはその格好を何とかしないとな」  
「へ？あ」  
よく見ると集の制服は土だらけで元の色が見えてなかった。  
「私の家に行こう。すぐ近くだからな」  
「ええ、分かりました」

森を出るとそこにはたくさんの露店が立っており



人々の活気の言い声が聞こえてきた。

「あ、どうだい！その奥さん！このネックレスきれいだろ？」

「おばちゃん！頂戴！」

「へ〜結構広いですね」

「まあな。ここはこの地域では一番規模が大きいマーケットだからな。所で君はどこからきたんだ？」

「え、え〜っとですね。まあ、遠い所から」

「そうか、長旅で疲れて寝てしまったのか？」

「ははは！〜そうなんですよ！」

「ならば宿にでも泊まれば良かったものを」

「じ、実は今お金が一文無し何です」

「一文無しとは何だ？」

「しまった〜ここは日本じゃないから

ことわざとかも知らないんだっ

「あ、いや僕の国の決まり文句でしてね。

お金が全くない事を言っんですよ」

「ほ〜初めて知ったな。今度詳しく教えてくれないか？」

「え、ええまあ」

「うむ。約束だぞ！」

ゆえはとてもきれいな満面の笑みで集に笑った。

「はい！」

集も満面の笑みで笑い返した。

「ここが私の家だ」

「へ〜結構大きいんですね」

「ふふ、まだ小さい方だぞ？」

そこには結構大きめの家が建っていた。

広い庭がありきれいな花や木々がたくさん生い茂っていた。

「あら、ゆえちゃん。御帰りなさい。

その隣の男の子は？」

「ああ、紹介するよ。この子はさつき森であった旅人の如月集だ。それでこっちが私の母だ」

「はじめまして。如月集と申します」

「ふふ、そんなにかしこまらなくても良いわよ？

私はゆえちゃんの母の桜ゆいです。

よろしくね〜集君」

「はい、よろしくお願ひします」

「ま、ひとまず中に入ろうか」

「あ、はい」

「上がって頂戴」

ひとまず集は客室に案内された。

「ひとまず集。体を流してきたらどうだ？」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「そんなに畏まらなくていいぞ？」

「え、あじゃあ、分かった」

「ああ。シャワー室はそこを右に曲がった突き当りだ。タオルなどは後で持って行くよ」

「ああ、ありがとう」

「覚悟はしていたけどお風呂じゃないか〜」

集が入った場所はお風呂ではなくただ単にだだっ広いシャワーだけの浴室みたいなものだった。

そこで、集は一応体を洗い貸してくれたタオルを使い、服も借りた。

「ああ、上がったのか。集」

「ああ、ありがとう。さっぱりしたよ」

「まあ、座れ」

「うん」

「ではまずは君の話詳しく聞かせてもらおうか？」

「へ？何の事？」

「惚けない方がいい。私の勘は良い方だな。」

君はこの・・・いやこの世界の人間じゃないんだろっ？」

「！！！！！！！！」

「凶星か」

「うん」

「話してくれないか？何か力になれるかもしれない」

「分かった。話すよ」

それから集は今までの事を話した。

自分は異世界から来た者で日本という国の事など

「そうか。つまり君は異世界から来たという事で良いかな」

「うん。ま、気にしてないけど」

「元の世界に戻りたくないのか？」

「何で？」

「何でって君が今まで過ごしてきた世界なんだぞ？」

そして突然目を覚ましたら異世界って怖くないのか？」

「興味無いね」

「何？」

「僕は別にどうなるのが興味無いよ。そこで起きたことに関しては僕は全部無条件で受け入れるからな」

「・・・何があつたんだ？」

「・・・何もなかったよ。何もね」

そっついう集の目は悲しそうな顔をしていた。

「そう言えば集はこんなのを見た事はあるか？」

「ん？」  
するとゆえが突然、手のひらから炎を出した。  
「……………へ〜」  
「むむ？感動すると思ったんだがな。これも興味無いのか？」  
「ああ、無いね。全く」  
「そう言いながらもお前、ガン身だぞ？」  
集は炎を近くでまじまじと見ていた。

「……………凄いな。僕にも出来んのか？」  
「分からないな。君はこの世界の住人ではないからな。  
この世界では幼い頃からこれを勉強してるらな」  
「それって魔法なのか？」  
「ああ、魔法だよ」  
「……………教科書あるか？」  
「ああ、あるがどうするのだ？」  
「見せてくれ！！俺もマスターしたい！」  
その目はきらきらしていた。  
「い、良いぞ。後ろの書庫に大量にあるから見えていいぞ」  
「よーし！」  
そう言い集はダッシュで書庫に向かった。  
「あら？集君は？」  
「集なら書庫に行ったよ」  
「あらそう。折角おいしいパンを作ったのに」  
「まあ、後で分からなくなって出てくるさ。  
その時に食べさせよう」  
「そうね」

そして夜〜

「おい。集、大丈夫かゝ入るぞゝ」

ゆえが入るとそこには・・・

「何をしてるんだ？」

「・・・本の海で泳いでる」

本の山に埋もれた集がいた。

「それよりも晩御飯だぞ」

「ああ、悪いな」

集はゆえに連れられ晩ご飯を食べ  
また書庫にこもり一日を過ごした。

**第1話 目が覚めたら魔法の世界！？（後書き）**

こんばんわ。連続更新です。

如何でしたか？

感想もお待ちしております。

それでは、さよなら

第2話 目覚めの時 Wake up!!!

「ん〜良く寝た。さてと起きるk」

ゆえが起きようとした時、庭で大爆発が起こった。

「な、何だ!？」

「大丈夫!? ゆえちゃん!!」

「うん。私は大丈夫だけど何が起こったの?」

「分からないわ、庭の方で何かあったみたいだけど」

「私が行ってくる」

「・・・気をつけてね」

「うん」

ゆえは黒いマントをはおり刀を持って庭に出た。

「・・・切つていいか?」

「だ・・・め・・・に・・・きま・・・てんだろ」

そこには黒焦げになった集がいた。

「一体何をしたらこんな大きな穴を開けるんだ?」

集は大きな穴に落ちていた。

「いや〜実はさ、昨日書庫の本、全部読み終わったからさ。

俺も魔法を試してみようと思ってさ」

「あの書庫には数万冊の本があると言われてるんだぞ!

それに君はまだこの世界の言葉を知らないんじゃない?」

「うん、そうんだけど何故か読めたんだよ。

まあ、本読むの好きだし

読む速さも自信あるし。最後には

なんだっけ?だ、だい」

「大魔法全書か?」

「そう!それを読み切つてやったら爆発した」

「どれどれ……!!!!」

ゆえが見たページには賢者クラスと書いてありそこには炎の最大魔法が記されていた。

「流石に最大魔法はきついな」

「集。君はどれからしたんだ？」

「それだけど？」

「は、死ぬ気か。まずは初級魔法からだろっ」

「ああ、そうだな。よし！いくぜ！」

集が手のひらを返すと炎が出たことには出たが音だけがデカイ爆弾みたいな魔法だった。

「うお!!」

「ふむ。炎はダメと、よし次だ！」

「お、おう！次は水だ！」

もう一度出すと今度は蛇口から出る水みたいにチヨロチヨロと出てきた。

「…次行こうか」

「うん……」

「君はある意味凄いな」

「……………」

ゆえの真下にはぼろぼろになった集がいた。

「雷を出せば感電し、自然を使えばつるが自らを縛り無機を使えばがらくたが出て、肉体強化を使えば豚みたいなデブになった」

「仰る通りです」

「つまり君は今のところはどの属の魔法も

使える事は使えるが実践には無理という状態だ」

「でも、まだ属はあるぞ」



「闇と氷だな。だが闇に関しては魔族のみが使える  
氷に関しては机上の空論だ」

「あゝ最悪だゝ」

「集」

「何？」

「学校に行ってみてはどうだ？」

「は？学校？」

「ああ、そつだ。学校に行けば自分の魔法が分かるかもしれない」

「でも、僕が行けるのか？」

「どうしてだ？行きたくないのか？」

「そりゃ行きたいけど学費とかがだな」

「ああ、それなら大丈夫だ」

「何で？」

「私の父は守護隊の隊長だからな」

「守護隊って？」

「守護隊とはその名の通り民間を護るために

結成された国家直属の部隊なんだ」

「ふゝん。それで？」

「行くか、行かないか」

「……………行く」

「よし！ならばさっそく準備に取り掛かろう！！」

それから忙しかった。

まずはゆえの父に了承を得るために会ったり

部屋着を服を取りそろえたり等など色々な事をした。

そして……

「ふああああゝ」

「おいおい、本当に受験生か？集」

ゆえと集は学校の前にいた。

「眠いものは眠いの。それで、ここが」

「そうだ。ここが私が通ってる

シルバロン魔法高等学校だ!!」

そこには真っ白な建物に闘技場のようなもの。

それに寮の様なものやさらにはお店までもが完備されていた。  
すると二人の前に一人の女性が突然現れた。

「うお!!」

「はじめまして。貴方が如月集君ね？」

「はい」

「私は今日一日貴方の試験官を務める

フィーリ・ブリュツセルよ」

「よろしくお願いいたします」

「ええ、よろしくね。早速会場に行こうか。

桜さんも来る？」

「はい!」

二人はフィーリに連れられて試験会場に案内された。

「まずは今日の日程を説明するわね。

この編入試験は一日を通して行われるわ。

まずは一次試験の筆記テスト。次に

二次試験の身体能力を計る実技テスト。

最後に魔法戦闘を見る実技試験。質問は無いかな？」

「はい」

「よし、なら始めよう」

「がんばれよ!集」

「ああ、任せろ」

こうして集のテストは始まった。

一次試験：筆記テスト

☆結構難しいな。でも、解けない事は無い☆

二次試験：実技テスト

「このテストでは私の魔法を避けてもらうぞ。自分の魔法は使わないでね」

「了解」

「では、始めるぞ!!」

合図とともに次々と魔法が放たれた。

炎の玉や雷の弓の様なもの、

水を周りに敷いて雷を全体に通すものなど

ハイレベルな攻撃が行われたが、

集は何とか全てかわした。

「はい。そこまで！次でラストよ…」

と言いたいけど昼休憩よ」

「りよ、了解」

休憩室へ

「お疲れさまだな。集」

「ああ」

「しかし貴様は避けるのだけはピカイチだな」

「褒めてんのか貶してんのか、どっちだよ」

「褒めているんだぞ？」

こここの入試試験はかなり厳しいものだ。

そして編入試験はさらに厳しいものだと言われている。

私もやったが一回は当たってしまったぞ」

「偶然だよ。偶然。じゃ、そろそろ行くわ」

「ああ、行って来い!!」

「お疲れ様。これで最後よ」

「はい」

「内容は私と全力勝負よ」

「了解」

「さっきの試験でこの人の攻撃は

大体読めた。あとは」

「言っとくけどさっきの試験の魔法はかなり手加減したから」

「!!!」

「本気で来ないと」

フィーリは手に炎を纏わせ地面を殴った。

すると…

「ま、まじで？」

地面が大きくへこんだ。

先程の試験では全く傷すらつかなかったものが。

「死んじゃうわよ？」

「ひい!!!」

最終試験が始まった。

別室でゆえが二人の勝負を観戦していた。

しかし、その内容はフィーリが圧倒的に有利な状況だった。

「まずいな。今の集はまだ魔法をキチンと使えていない。」

それに自分にあつたものも未だに分からない。」

ゆえが考えていると後ろから何人かの人物がやって来た。

「お〜お〜やってるやってる」

「珍しいな。貴様らが見に来るとは」

そこには5人の少女と1人の少年がいた。

「別に良いでしょ？私達も見に来たいときもあるわよ」  
金髪で露出度がかなりきわどい少女が話した。

「いい加減貴様のその破廉恥な服はやめろ。目に毒だ」

「あら。それでもスタイルは抜群よ」

金髪の少女が言うとおり腰はかなりくびれており  
胸もかなり大きく顔も整っており  
軽く化粧をしていた。

「ゆえ……正解……貴方……凄く……破廉恥」

「貴様も貴様だがな」

今喋った少女は緑色の髪の毛に

身長は少し低めできれいというより

可愛いという言葉がぴったりだった。

「彼……噂……人物」

「ああ、そうだ。彼は」

ゆえが言いかけた時少年が口をはさんだ。

「如月集。生年月日・身長・体重・年齢と共に

不明な少年だ。おれでも名前しかわからなかった」

「へ〜この国一の情報通と謳われるあんたでさえ

分からないなんてね。ミステリアスで良いじゃない」

少年は服にかなりのチェーンを巻きつかせ動かたびに  
じゃらじゃら言っていた。

もう一人の少女は青い髪の毛をしていた。

「……………」

何もしゃべらない少女は黒髪で腰ぐらいまでの  
長さの髪をしていた。

「なあ、何であいつ魔法使わねえの？」

「私…不明…回答…要求」

「ああ、集は、そのだな」

「魔法が使えない、いやまだ眠っているのか」

「………!!!」

少年が部屋に入って来た事により

その場の空気が一気にピリピリしたものに変わった。

「へへ貴方が来るなんてね。今日は大雨の日かしら？」

「悪いが俺は雨男ではない」

この少年は髪の色が6色に分かれていた。

「何故その事を？」

「何となくだ。貴様らも感じているんだろ？未だ

感じたことのない気配を」

「………」

「まあ、その内、面白くなるさ」

「はあ、はあ」

「どうして魔法を使わないの？」

「さあね」

「余裕をこいてる訳でもなさそうね。

まあ、良いわ。これでフィニッシュよ!!」

フィーリは左右の手から炎を出した。

「ねえ、知ってるかしら？水を急に熱するとどうなる？」

「水蒸気となり気化されるだろ？」

「そう。でもその水蒸気って結構」

「!!!!!!」

「気付いたようね。でも、遅いわ」

フィーリは巨大な爆発を起こし一気に水を気化させかなりの熱を持った水蒸気を発生させた。

「集!!」

その光景を彼女たちも見ていた。

「あゝあ。残念。フィーリ先生の得意技来た」

「あれは未だに完全に防げる気がしないぜ」

「私…同感」

「終わったわね。帰ろうかな」

三人の少女達が帰ろうとした時

「待て。これからだ」

「「「?????」」」

「さあ、見せてみる。お前の魔法を」

「あちゃ〜やりすぎちゃったかしら?」

フィーリはのんきに考えていた。

「でも、これであの子は…??」

突然フィーリの体が震えた。

「寒!!…まさか、彼がこれを?」

フィーリは集のいる場所を見つみると

「う、嘘でしょ」

巨大な氷がそこにはあった。

第2話 目覚めの時 Wake up!!! (後書き)

おはようございます!!ケンです!!  
如何でしたか?

今日確認したらアクセス数がまさかの14でした。

確認したとき、まじで?と思いました。

まあ、二次創作とは違って一次創作は

ヒットしにくいですからね

感想もお待ちしております!!

それでは



### 第3話 全てを凍らす者

「ここはどこだ？」

集は浮遊感を感じていると

頭の中に声が響いてきた。

『ふむ、貴様が呼んだのか？』

「誰？」

『私は氷の魔法の……まあ何だ、そう言う事だ』

「全く分らないんだけど？」

『つべこべ言うな。で？どうする？』

「何が？」

『貴様は氷魔法の力が欲しいか？』

「氷？氷魔法は確か机上の空論だけ？」

『違うな。その昔大きな魔法戦争があった事は知っているだろう？』

「うん、まあ？」

『そこでその戦争を止めた英雄はだれだ？』

「確か炎、雷、水、闇、無機、自然の魔法使いじゃなかったけ？」

『そうだ。だがそれは口伝え故に一つ消えた属性がある』

「それが氷？」

『そうだ。さあ、どうする？このまま死ぬか』

奴を倒し合格するか！！選択するんだ！！』

「僕は……合格するんだ！！合格してこの世界で

楽しく過ごすんだ！！だから力を！！』

『良いだろう！』

「こ、氷？」

「あいつ何をしたんだ？」

「氷の魔法は存在しないんでしょ？」

「……………」

「不明：実際：目の前：起こってる」

「見る！氷が砕けるぞ！」

ゆえが叫ぶとともに氷が砕け現れたのは…

「集なのか？」

髪の色が白色に染まった集がいた。

「そ、そんな氷の魔法は存在しないんじゃないか！」

「……凍れ」

集が地面を蹴ると共に辺り一帯が凍り始めた。

「ああ、もう！！」

フィーリは自然の魔法で大木を出現させそれを足場にして空中に飛び上がった。

「空気は凍らせられないでしょ！！」

「ふん、なめんなよ」

集の足もとが凍りだし氷柱となり一気に伸びて近づいた。

「う、嘘！！」

「空中では動けないよね？」

集が空気を叩くとフィーリを巻き込んでフィーリがいる場所から床まで一気に凍った。

「どうだ？」

しかし、氷が突然割れ一人の男が現れた。

「ん？貴方は？」

そこには六色の髪の色をしている少年がいた。

「すまないな。割り込む気はなかったんだが今の君は危険すぎるため、割り込ませてもらった」

「じゃ、じゃあ試験は？」

「合格でよろしいですね？フィーリ先生」

「ええ、文句の言いようがなく合格よ」

「よっしゃー！！」

喜んだ瞬間、集は気を失ってしまった。

「ん？ここは」

「目が覚めたか、集」

横にゆえがいた。

「うん、でもここは？」

「ここは」

「ここは保健室よ！！」

「「???」」

後ろからドアが蹴り破られたかと思うと五人の少女が出てきた。

「え、えつと誰？」

「ああ、紹介しよう。まずは破廉恥娘だ」

「誰が破廉恥娘よ！！私の名はライカ・サイトよ！！」

ライカで良いわよ！」

「は、はあ」

「じゃあ、次は私ね？」

私はアクア・ラナよ？ラナで良いよ？」

「ど、どうも」

「私…名前…フォレル・シンラ。」

…フォレル…良い」

「な、何故に片言？」

「昔かららしい」

「……」

「ほらあんたも挨拶、挨拶」

「……」

黒髪の少女がライカに耳打ちした。

「大丈夫だって！さあ、早く」

「わ、わた、私の」

黒髪の少女が名前を言いかけた時、集が突然頭をなで出した。

「ふえ？」

「そんなに怖がらなくても良いよ」

「…うん！私の名前はルーラ・ダークって言うの！！  
ルーラで良いよ！！」

「珍しいわね」

「確かに、ルーラが初対面の人に怖がらないとは」

「ねえ、集君だっけ？」

「はいそうですが？」

「何で君はあの時なでたりしたの？」

「怖がってたからかな」

「意味が分からないけど、これからよろしくね？」

「ええ」

「これで集も私達と同じ学校か」

「一緒のクラスになれたらいいな」

ゆえとラナが嬉しそうに言った。

「そうですね。それでいつから何ですか？」

「今は長期休暇だから多分、登校は

長期休暇明けになると思うよ」

「楽しみです。ルーラさん」

「もう！ルーラで良いよ！！」

「癖だね。まあ、一週間もすれば治るよ」

「そろそろ帰ろうか、集。先生も帰っていいと  
さつき、言っていた」

「うん」

<理事長室>

「ふむ。この子が例の」

「はい」

「で？どうだったかな？机上の空論の氷魔法は」

「はい、実際戦ってみて応用性、破壊力ともに

目を見張るものがあります。しかし、慣れていないのだと思います。威力にむらがありました」

「ふむ」

「それに試験が終わった後、気を失うほどまでに疲労していました」

「そうですね。ですが将来性はあると」

「はい」

するとドアがノックされた。

「どうぞ〜」

「失礼致します」

先程の六色の少年がやって来た。

「相変わらずカラフルな髪の色ですね」

「そうですね。昔からこれです」

「それで、どうでしたか？」

「はい。過去の文献を徹底的に漁ったところやはりある時代の所で意図的に氷魔法の文献が消されていました」

「そうですね。それでその時代は？」

「魔法革命時代です」

「そうですね…」

「どうなさいますか？」

「ん〜今は観察という事にしておきましょう」  
「分かりました。失礼致しました」

「如月集君か。楽しみだ」

その顔はまるで子供のような純粹な笑顔だった。  
実際子供の様な姿だが

「あ？」

「どうしましたか？理事長」

「いや、今子供と言われたような」

「気のせいでは？」

「だな」

### 第3話 全てを凍らす者（後書き）

こんばんわ！ケンです！

いや〜一次創作は難しいですな〜

今日アクセス数確認したらまだ、51人でした〜

まあ、まだ連載しだして二日目ですからね〜

これから増えて行く事を祈っています。

それよりも如何でしたか？

次回で集が学校に編入致します。

それでは、感想もお待ちしております。

さよなら〜

## 第4話 初めての登校日

ここは学園の地下にある訓練場。  
年中余程の事がない限り開いており  
生徒が鍛練するのにもっとも最適な場所である。  
今この場所で一組の男女がいた。

ゆえと集である。

「ふむ。ではやってみろ」

「ああ。行くぜ!!」

集が地面に手を置くとその箇所が徐々に凍り始めていき  
最終的に巨大な氷の花を咲かせた。

「うむ。前に比べるとムラもなくなつて

威力も安定している。それに疲労も少なくなった」

「そうか？」

「ん？何か不満なのか？」

「ああ、まだ何か足りない気がするんだよ」

「何かとは何だ？」

「それがさつきから考えているんだが分からないんだ」

「難儀な話だな」

「ああ。まあ、前よりも疲れもないし。

成長はしたかな？」

「そうだな。だが、まだ鍛練しないといけないぞ」

「ああ、次やろうぞ」

集が言おうとした途端に訓練場のドアが蹴り破られた。

「おっはよー！ー！！」

「おはよ」



「…おはよう…」

「おはよう？」

上からライカ、ルーラ、フォレス、ラナである。

「ああ、皆おはよう」

「おはよう」

二人も挨拶を返した。

「朝早くから熱心な事ね」

「まあ、鍛錬しないと強くなれないし」

「…言つとおり…」

「で？どうだったの？集」

「うん。だいぶ慣れたよ」

「そつかゝねえ、今度私と模擬戦しようよ！」

「ああ、そうだね。僕も一回皆と闘いたいな」

「そんな事よりも行くぞ。始業式が始まるのだから」

「了解」

ゆえが皆に言つと早足で歩いていった。

「ここか？理事長室は」

集は今大きな扉の前にいた。

「よし、失礼します」

「はい」

集が入るとそこには小さな子供がいた。

「間違えたか？」

「合っているぞ。私がこの学校の理事長だよ」

「理事長！」

「あ、やばい！」

すると理事長は集の後ろに隠れてしまった。

「あ、あれ？君、理事長知らない？」

「ええ、知りませんが」  
「そう、ありがとう」

「もう良いですよ」

「ふゝすまないな。君が如月集君だね？」

「はい。えゝと本当に理事長？」

集が膝を曲げてしゃがみ込んだ瞬間

「そりゃー!!」

「ぐえー!!」

突然、顎に頭突きを貰った。

「ふん！初対面の人にそれは無いのではないか？」

「す、すみません」

「まあ、良い。もう慣れたしな。さて、君のクラスなのだが」

「はい」

「ああ、その前に言う事があつた」

突然思い出したかのように言いだした。

「君の魔法なのだがね」

「はい」

「出来るだけ、使わない方がいい」

「何故ですか？」

「君の魔法は氷だったね？」

「ええ、まあ」

「それは今の常識では有り得ない魔法なんだ。

まあ、昔は常識だったみたいだがね。

それに、今は不穏な動きを見せる輩もいるからね」

「分かりました。出来るだけこれは使いません。」

でも、誰かの命が関わつてるときは使いますよ?」

「ああ、そこら辺の判断は君がするといいさ」

「はい、それでクラスは?」

「ああ、すまない。クラスの方は選ばせてあげよう」

「へ?」

「実はなこの学校の入試・編入試験で優秀な成績を

取った者にクラスを自由に決める権利を与えているんだ。

そこで、君は史上初の全教科満点だ」

「まじですか?」

「まじです。何組が良いんだ?

ちなみに上から優秀な輩が集まっているぞ」

渡されたクラス表には全部で10クラスが書いてあった。

「…………… だったら僕は8組で」

「ふむ。何故だい?君の実力ならば

余裕で1組に入れるんだがな」

「何となくです。それに僕って上ら辺の

クラスって嫌いなんですよね」

「だったら4組とか5組でも良いんじゃないのか?」

「一番初めに見えたのが8組だったもんですから」

「ふん。分かった。では、君は8組の29番だ」

「分かりました。それで、担任の先生は?」

「ああ、担任は」

「私ですよ。集君」

そこにいたのは編入試験で戦ったフィーリ先生だった。

「フィーリ先生!」

「おはよう。じゃあ、行きましようか？」  
「はい！」

こうして集は8組に在籍する事になった。

二人が出て行った後理事長は後ろを向き

「……出てきなさい。隠れてるのは分かってるぞ」

「おやおや、バレてしまいましたか。さすがは最強の乙女ブリュンヒルデ」  
「たわけ。それは昔の名前だ。今は」

「か弱き乙女ですか？」

「分かっているじゃないか。第四位。で？何の用だ？」

「まあ、少し興味があるお話を

されていたので聞きたいと思ひましてね。

それとその第四位という呼び方はよして下さい」

「ふん。まあ良い。だが残念だったな」

「そうですね。彼なら確実に1組に来ると思ったのに」

「私も安心しているよ。あんな人間とは思えない奴らのいる  
1組に入らずに済んで」

「おやおや、えらい言われようですね」

「そうか？あそこは実力主義の馬鹿が集まるところだからな」

「それは自分も同感ですね。貴族の在籍率が

この国ではトップの学校ですから」

この世界には貴族と呼ばれるものが存在している。

貴族は、その昔、活躍した偉人達の血を

継いでいると言われそれにより貴族は

税金が減額されるなどの特権などが与えられ優遇されている。

しかし、その影で権利が乱用され貴族と平民の間の差別などが  
今日の問題となっている。

「私は貴族というものが嫌いだな。自分は何もしていないのに偉人達の栄光をあたかも自分の物の様に飾る」

「そうですね。下のクラスにも彼らよりも優秀な生徒はいますから。ま、どの時代でもそういう咬ませ犬は

存在していますから。しかし、そのお陰で

この学校も一躍有名となっているでしょ？」

「私は名声などには興味がなくてな。この学校は先祖代代ひっそりと受け継がれてきたものだ。

今頃、ご先祖様は泣いておられるだろうな」

「ふふふ、そうですね。まあ、考えは人それぞれありますからね。そろそろ時間ですので私はこれで」

「ああ、その前に言う事があるぞ」

「何でしょうか？理事長」

「今年は気を付けた方がいいぞ。何せ彼がいるのだからな」

「如月集君ですか…忠告として受け取っておきましょう」

そっくりい少年は消えた。

「さて。この学校でどんな事を

してくれるのかな？パラボックス異世界人」

理事長はその顔を歪めさせ笑った。

「じゃあ、私が言ったら入って来て頂戴」

「分かりました」

先にフィーリが入っていくと先程まで騒がしかった教室が静かになり号令が響いた。

「おはよう、皆」

「……おはようございます……!」「」「」

「はい。じゃあ、SHRを始めるわね。まずは皆長期休暇はどうだったかしら?」

「今日から心機一転してやっていきましょうね」

「先生は男、出来ましたか?」

「……成績を10段階ほど落としておこうかしらね」

「す、すみませんでした……!」

教室から笑い声が響いた。

「あの人独身だったのか」

「ちやっかり初めて知った集だった。」

「それよりも今日はビッグニュースがあるわよ」

「もしかして先生が30代に入ったとか?」

「……来年は留年かしらね」

「す、すみませんでした」

「そうじゃなくて今日は転校生よ……!」

「……おおおお……!」「」「」

「こんな時期に転校生?」

「男かな?」

「男だったら狙おうかな」

「じゃあ、入って来て頂戴」

「そう言われ集はドアを開けて入っていった。」

「……」「」「」

「え、如月集です。分からないことだらけですがよろしく願います」

「……」「」「」

「「「きや」「」

「きや？」

「「「きやあああああああ！！！！！！！」

「！！！！！！！！」

突然、女子生徒達が甲高い叫び声をあげた。

「カッコいい！！」

「あの、白い髪に静かなオーラ。クール！！」

「この国に生まれてきてよかったー！！！！！！」

「はい。静かに！！じゃあ、如月君は端の席ね」

「はい」

「じゃあ、この後は教室で放送による始業式があるからね」

「「「はーい！！！！」

「あゝ疲れた」

「にやははは！！大変だなゝモテ男め」

「ん？君は」

「ああ、俺はゼロ・エスターテって言うんだ。よろしくな！！」

「ああ、よろしく！！」

「それで、お前の魔法は何なんだ？」

「ああ、僕は…秘密だよ」

「うゝケチだな」

その後、ゼロを通してクラスのみんなとは知り合いにはなった。

そして、始業式も終わり授業は明日からという事で

今日は午前中には帰宅となった。

「んゝ眠」

「おお、いたいた」

「ん？ゆえか」

「私達もいるわよ」

ひよこつとライカとルーラ、そしてフォレスが現れた。  
「ねえ、集って何組なの？」

「僕は8組だよ」

「ふ〜ん。集なら1組に来ると思ったのに」

「どうも、上のクラスって好きじゃないんだよな」

「ふ〜ん。あ、ちなみにここの皆は全員1組だよ」

「1組か。また遊びに行くよ」

「あ〜それは止めておいた方がいいわね」

「どうして？ライカ」

「1組…貴族…多い…差別…黙認…ひどい」

フォレスが片言で呟いた。

「ああ、この学校はこの国で  
最も貴族の在籍率が高くてな」

「あいつらは一組の奴らには優しいけど」

「他クラスには平気で魔法的の的にしたりとかするんだよ」

ゆえの後に続けてライカとルーラが補足した。

「ひどいな」

「ま、集なら問題ないだろう」

「だと良いけど」

「心配…集」

「ま、今日は帰りましょ」

「そつだな」

「おい、見たか今の奴」

「ああ、見た」

「あいつ1組じゃないよな？」

「ああ、カスクラスの癖に我らの



姫たちと対等に話している」

「これは報告だな」

集が1組の生徒と一緒に帰っている光景を恨めしそうに見ていた事に気付かずに笑いながら集は帰っていった。

#### 第4話 初めての登校日（後書き）

こんにちわ！！ケンです！！

如何でしたか？

一時創作は難しいですね。

こんな作品をお気に入り登録して下さった  
方には感謝です！！

感想もお待ちしておりますので。

それでは！！

## 第5話 決闘の申し込み、そしてランカーの存在

「ん〜よく寝た〜さて、起きるとするか！」

桜ゆえの朝は5:00から始まる。

顔を洗い軽く歯を磨いた後

家の周りをジヨギング。そして魔法の鍛錬を行う。

そして、それを三十分で終わらせた後

剣を15分間振るい、

今日の座学の予習を行う。

これが終わった時間に集が起きてくる。

最近はこのパターンが多くなっていた。

「遅い。何故今日は集が起きるのが遅いんだ」

ゆえは居間でイライラしながら待っていた。

何故待っているのかというと集の鍛錬に付き合っただけである。

集はまだ、細かい魔法の操作が粗いためそれを

鍛錬するのだが今日はいつもよりも来る時間が遅かった。

「仕方がない。起こしに行くか」

ゆえは集の部屋へと足を運んだ。

「起きろ！集！時間だぞ！！」

ドアを強く開けると部屋から冷気が漏れてきた。

「寒いな。仕方がない」

魔法を扱うものは最も自分にあつた魔法が体に

大きく影響を及ぼす。例えば雷を扱う者なら金髪で

年がら年中、静電気が起きてしまい  
髪を整えるのも一苦労する。

炎を扱う者なら、人よりも体温が高く冬でもそれ程  
着こまなくても寒いとは感じない。

そして、氷の集は髪の色が白になりそこにいるだけで  
天然のクーラーとなる。

なので部屋に溜まった冷気がドアを開けたことにより  
外に漏れ出したという事である。

しかし、全員が全員、髪の色が染まったりする事はない。

案の定、集は気持ち良さそうに涎を垂らしながら  
熟睡していた。

「やれやれ。起きろ、集！！」

「うお！！」

耳元で叫ぶと集が飛び起きた。

「鍛錬の時間だぞ」

「へ？もうそんな時間？」

「ああ、とつくに過ぎている」

「ごめん。すぐに準備するよ」

「ああ」

ゆえは集が着替えるので外にいと

ぼさぼさの髪のもで出てきた。

「集。その寝癖は何かならんのか？」

「直すのめんどくさいしね。始めようか」

「ああ」

こうして朝の時間帯はこうして過ぎて行く。



キーンコーン、カーンコーン

「む。ここまでか。じゃあ、今日は終わりだ。

宿題はさっき言った通りの場所だ。

くれぐれも忘れるなよ？特に！ゼロ！」

「は。はい！」

「今度忘れたらみっちりしごいてやるからな」

「は、はい」

「つ、疲れた」

「全部寝ておいてよく言うな。ゼロ」

「寝るのも疲れるんだぜ？な、後でノート見せてくれ」

「良いけど、所々端折ってんぞ？」

「良いの、良いの」

「なら、良いが」

「さっすが集だぜ！トイレ行こうぜ」

「ん。分かった」

「にしても簡単だったな」

「まあ、今は基本事項しかしてないし、俺達一年だし」

「そうだな。ん？あれは？」

集が見たものは二人の生徒が何やらあつたらしく

野次馬が見えたのだ。

「うわ、あれは関わらない方がいいな」

「何で？」

「よく見てみるよ。あの胸の刺繍」

「刺繍？あれがどうしたんだ？」

「あれが付いているのは貴族って印なんだよ」

「ふん」

何かあった生徒の片方には胸に刺繍が付いておりそれが、貴族の証だという。

「お前、この俺にぶつかるとはいいい度胸してんじゃないか。平民のくせに」

「す、すいません」

「このワルロス家の長男にぶつかっておいて

それだけかよ？ああ！？」

「ご、ごめんなさい。で、でも急に貴方が出てきたから避けきれなくて」

「ああ！？この俺がわざとお前などにぶつかったとでもいうのか！？」

「な？やばいだろ？」

「ヤバいというか、ワルロスって奴名前にワルってあるから外見も悪そうだな」

集の言うとおりその生徒は金髪で服装もかなり着崩していた。

「お、お前！くくくくく！わ、笑かすなよ」

「ぶくくく！だって、見るからに悪そうだろ？」

「くくくく！我慢だ、我慢だ」

「貴様分かっていないようだな。貴様そこで逃げ」

「え？」

「あ？」

「聞こえなかったか？逃げと言っている」

「い、嫌です！」

「ほう。平民の癖に貴族の言う事が聞けないのか!!」  
ワルロスは女子生徒に手を振り上げた。

「きゃ!!」

「貴様、何の真似だ？」

「こつちが聞きたいね。貴族の男子が  
か弱き乙女に手を挙げていいの？」

ワルロスが女子生徒を殴ろうとした腕を

集は掴み、当たる寸前で止めていた。

「ふん。そんな奴生きていても変わらないだろう」

「あ？何だった」

「聞こえなかったか？貴族でもない奴が生きていても  
意味がないと言っているんだ!!」

集の中で何かが切れた。

「ぐっえ!!」

「!!!」

集はワルロスの顔を思いつき殴った。

「貴族の何が偉いんだ？こら!!」

「な、何だと？」

「お前らは何をしたんだ!？」

何か人に凄いとされる事をしたのか!？

てめえらはただ単に威張ってるだけだろうが!!」

「き、貴様!!俺を侮辱する気か!？」

「侮辱だと？お前がこいつを侮辱したんじゃないのか？」





「私の所為で貴方が貴族と闘う事になって」

「別に良いよ。それにあんな奴に負ける気なんかしないし」

「で、でも」

「良いから。さっさと教室に行きなよ」

「は、はい」

そしてその時間は何も起こらず一日が終わり放課後となった。

「集!!」

放課後、一人で帰っていると後ろからゆえの声が聞こえ振り返るとゆえとルーラ、そしてライカがいた

「ん、ゆえか。どうかしたのか？」

「どうかしたのかじゃない!!何であんな事をしたんだ!？」

「あんな事？」

「今朝の事だよ。集ったら貴族を殴ってさらに決闘まで受けたんでしょ？学校中の噂になってるよ？」

「ああ、そんな事か」

「そんな事か、じゃない!!分かってるのか!？」

君の今の實力は」

「うるさいな」

「何!？」

「決闘を受けたんだから俺はそれを受ける。

そして、あいつに勝つ!!」

「だ、だが」

「いいじゃない。ゆえ」

「ライカ!!だが」

「どうしたの?あんたらしくないわよ?」

「だが」

「大丈夫だよ!!きっと集は勝つよ!!ね?」

「当たり前だ！！絶対に勝ってやる！！」

ゆえside

ゆえは自室で考えていた。

「なぜ私はあの時、あそこまで必死になつて集を止めたんだ？集が怪我をするからか？

いや、集は確かに強くはなっている。だが、その強さは平民の中でつて言う事で、

いや、だが貴族とも…あゝもう。分からん考えれば考えるほど泥沼にはまっていた。

「ゆえちゃん。ご飯出来たから降りておいで」

「はい。ま、良いか」

「ご馳走様でした」

「はい。美味しかったかしら？」

「はい！とても美味しかったです！！」

「ふふふ、ありがと。食器は置いておいていいわよ」

「はい、ありがとうございます！！」

「集、少しいいか？」

「あ、悪い、寝る前で良いか？」

「あ、ああ別に良いが」

「悪いな」

そう言い集はどこかへと出かけてしまった。

「最近、集君食事が終わったらすぐにどこかに行くわね」

「え？それって本当？お母さん」

ゆえの母が突然、思い出したかのように言った。

「うん。だって昨日も食べた後に出て行って

帰って来たのは夜遅かったかしらね」

「そう…ありがとう。ご馳走様でした」

「はい」

「あ、しまった。教室に宿題を忘れた。

仕方無い。取りに行くか」

ゆえは復習をしていると授業で出された

宿題にプリントを学校に忘れた事に気がついた。

「まだ、時間もそんなに遅くはないから取りに行くか」

ゆえは母に断ってから学校に取りに帰った。

「あつた。あつた。これが無いと宿題が

出来ないな。ん？」

ゆえが帰ろうとしている時に地下鍛錬室の

明かりがついている事に気がついた。

「こんな時間帯に誰が？」

ゆえはつけっ放しかと思ひ確認しに行くところには…

「集？」

集が一人で鍛錬をしていた。

「はあ、はあ。まだだ！！」

集は立ち上がり炎の魔法を放つが出した途端に  
炸裂し、炎が辺りに拡散された。

しかし、以前は音だけだった魔法が

辺りに炎を撒き散らすほどにまで上達していた。

へ凄い威力だな。初級魔法でありながら

ここまでの威力を出すとは。  
だが、やはり細かい作業が苦手のようだな

「またか…次やるか!!」

集はまた立ち上がり鍛錬を一人黙々と続けた。

「頑張れよ。集」

ゆえは敢えて集には声をかけずに気付かれないように鍛錬室を去り家へと帰っていった。

第5話 決闘の申し込み、そしてランカーの存在（後書き）

こんばんわ、ケンです!!!

如何でしたか？

感想もお待ちしております!!

それでは!!

## 第6話 初めての模擬戦、

「ん〜…やべえ！！寝過ぎた！！」

集が目を覚ました時間は鍛錬の時間を大幅に過ぎていた。

何せ昨日は細かい魔法の作業を鍛錬をしていたら

気付いたら日付が変わる寸前だった為、

慌てて帰って、寝たのは良いが

結果はこれだ。

「やばい、やばい！ゆえに怒られる！！」

集は慌てて階段を降り居間に入った。

「悪い！！ゆえ！！寝坊した！！」

「ん？集か。まだ、6：30だぞ？学校に行くには早い時間だぞ？」

「へ？」

予想とは違いゆえは満面の笑みで集を迎えた。

「い、いやだから鍛錬は」

「ああ、鍛錬か。あれは曜日毎にしようと思う」

「曜日毎に？」

「ああ、今日は休みにして明日にしようと思うのだが？」

「あ、ああ。そうさせてもらおう」

「じゃあ、まずは顔を洗ってきたら？集君」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「珍しいわね。ゆえちゃんが人を気遣うなんて」

「か、母さん！！人を鬼のように言わないでよ！！」

「あらあら。そこまで反応するなんて、もしかして集君の事が」

「集！！やはり鍛錬をするぞ！！」

「はー！？ちょ、ちょっと待て！！今さっき今日は休みだった！！」

「前言撤回だ！！鍛錬は毎日してこそその鍛錬だ！！行くぞ！！決闘は明日なのだぞ！！？」

「へい。ようやくゆっくりと朝を過ごせると思ったのに」

「なんか言ったか！？」

「い、いえ何ありません！！」

ゆえは顔を赤くしながら集を掴み出て行った。

「でも、本当に変わったわね、ゆえちゃん。

これも集君が来てくれたおかげかな？」

母は嬉しそうに顔を緩めた。

「で？今日は何をするんだ？」

「今日は私と模擬戦だ」

「了解」

「準備は良いか？」

「ああ、いつでも」

辺りに一瞬静かな空気が流れるがその空気は何かが発するような音で砕かれた。

「せい！！」

「うお！！」

何とか避けたが髪の毛が何本か抜けた。

「何だ今の？何かが発したような音が一瞬

した後、ゆえが目の前にいて、そして殴られた」

集はいったん距離を取りながら考えた。

「さあ、次行くぞ！！」



「つまりあの音がしたら伏せればいい事！！」

そして音が一瞬間こえ、ゆえが消えた。

「喰らうか！！」

集が伏せた瞬間、何かを通り過ぎた感じがした後、連れて放たれた炎に飲み込まれてしまった。

「たわけが。二度も同じ技を連続で使うと思うか？

使えば使うほど技は相手に慣れを与え避けられるものだ」

ゆえが言い終わった瞬間、炎の中から氷が見えた。

「危なかった」

「ギリギリで自らを凍らして炎のダメージを無くしたか」

「いや、ほんと危なかったよ。昨日までの僕だったら

確実にやられてた」

「ほ、昨日の自分よりも強いと」

「ああ。それと余所見は禁物だ。ゆえ」

「な」

ゆえが言いかけた瞬間、上空から氷柱が何本も落ちてきた。

「この前の僕は遠くの部分を、凍らす事は

出来なかったけど、今はある程度の距離なら

遠くの物も凍らせるようになった」

「そうか。それは喜ばしい事だ。だが、この程度で

私は倒せんぞ」

氷柱から火柱が立ち氷柱を一気に水へと

変えてゆえが現れた。

「ああ、そう思ってるよ！！」

集が腕を前に出すと

冷気が放出されゆえも炎を放出し防いだ。

「こんなものなのか？お前の力は！？」

「んな訳ねえだろ!!!」

集はさらに魔法を放っていくが  
それをゆえに魔法も使わずに全て避けていった。

「可笑しい。何故さつきから同じ攻撃ばかりしている」

先程から集は空間を叩くようにしてゆえに

氷をぶつけてようとしているが

先程から何度も避けられているにもかかわらず同じ攻撃をしていた。

「同じ攻撃ばかりして勝てると思ってるのか!？」

「さあね？」

「ならばなぞ!!!」

ゆえが言いかけた時何かにぶつかった。

「これは、氷?…まさか!？」

ゆえは慌てて周りを見渡すが既に

周りは氷山の様な氷に囲まれ逃げ道が無かった。

さらに大部分が水びたしになっていた。

「何もなしに同じ攻撃ばかりする訳ねえだろ!？」

突然、地面から体に電気が流れ込んできた。

「うぐ!!!まさか、この為に同じ攻撃で氷を作り

逃げ場をなくしていたのか」

「そつだ!!!」

「!!!!!!!」

見上げると集は空中に飛んでいた。

「さあ、終わりだ!!!」

集は逃げ道のないゆえに向かって

氷の魔法を最大威力で放った。

「残念だが終わるのは君だ」

「?????」

ゆえが地面を強く蹴ると円状に炎が展開していき  
部屋全体を覆うほどの巨大な火柱をたてた。  
それにより全ての氷は溶かされ集は空中にいるので  
回避できずに直撃した。

「はあ、はあ、はあ」

「私の勝ちだ、集」

集の首には刀が当てられており

周りにはいつでも攻撃できるように炎が揺らめいていた。  
「負けました」

二人は鍛錬場を抜け、教室までの道を歩いていた。

「あゝ疲れた」

「当たり前だ。あれだけばこすかと魔力の残量を  
考えずに使えば切れるに決まっているだろう」

「んゝつい意識から飛んでしまうというか」

「はゝそんな事で勝てるのか？明日の決闘に」

「あんたとあんな奴を比較したらダメでしょが」

「ライカ！」

後ろからライカが話に割り込んできた。

「おはよ。にしても傷だらけねゝ集」

集の全身には包帯が巻かれていた。

「ん、まあねゝ。じゃあ、僕はこっちだから」

「ん。また放課後ねゝ」

集は二人と別れ教室へと向かって行った。

「ねえ、ゆえ」



「よろしいではありませんか」

「あゝ何で貴方もそう言うのよ!？」

「私は決闘なんぞに興味はありません」

「だったら」

「でも、如月集君の実力が見たいんですよ。」

1組に入れる実力を持ちながら敢えて8組に行った彼の实力と魔法をね」

「残念だが集君は君の見たがっている氷は使わないぞ？」

「でしょうね。しかし、それだけが彼が1組に入れる理由ではないんでしょ？」

「……」

「勝手ながら私はあの編入試験の様子を見させていただきました」

「はゝ何度言えば分かる。あれは教員以外閲覧禁止だぞ」

実は教員用に入試・編入試験での戦いの様子を事細かに魔法で書かれた物が作成され保管されていた。

「まあ、そこは置いておいて率直に思ったのは異常ですね」

「置いておくのはよろしくないが、まあ良いが

集君が異常とはどういう意味だ？」

「ええ。彼のあの攻撃の避け方は

恐らくこの学園で一番、効率よくかつ疲労が少ない

避け方でしたよ。あんな芸当は恐らく我々でも無理かと」

「…それで」

「後は応用性です。」

あの、氷柱による接近は、初心者とは思えないですよ。

普通なら試しにどのようなものか、確認するんですがね。

まあ、まだ素人なので負ける気はしませんがね」

「ほゝそこまで気付いていたとは、大したものだ」

「これでも伊達に第四位をさせて頂いていますから」

「あの～そう言えば何ですがランカーって」

全部で十人ですよね？」

「ああ、そうだが」

「でも、分かっているのはたった数人ですよね？」

「ええ、皆シャイなんでしょう」

「それだけなんでしょうか？」

「さあな。とにかく明日の決闘は決行だ！！異議は認めん！！」

第6話 初めての模擬戦、（後書き）

こんばんわ！！ケンです！！

如何でしたか！？

つくづく自分の文才の無さを感じさせられますね。

他の方の作品を見ている時は特に。

感想もお待ちしております！！

それでは。

## 第7話 戦いの始まり

集が通学路を歩いていると突然、後ろから声をかけられた。

「…おはよ」

「…!!! ビックリした。フォレスか、おはよう」

「…今日…決闘…楽しみ…集…頑張れ」

フォレスは小さくガツポーズをした。

「へか、可愛い!!! たまんねえ!!! ギュっとなしたい!!! 家で愛でたい!!!」

「集…どうかした?…顔…可笑的い…」

「あ、ああごめん。応援よろしくな?」

「勿論…集…勝つ?」

「当たり前だ!!!」

「…そう…ガンバ」

そう言い残しフォレスは早足で教室に向かって行った。

「僕も行くかね」

集が教室に入ると全員が同情の様な視線を向けてきた。

「あ? 何だよ?」

「な、なあ今でも遅くないから謝った方がいい」

一人の生徒が集に近寄ってこう言った。

「何で?」

「だってお前、無謀にも程があるだろ。俺たち平民はあいつらには勝てない。絶対に。」

お前、今日負けたら、学園の笑いもん」

クラスメイトが言いかけた時、集が机にかかと落としをして机を粉碎した。

「…!!!」



「うつせえぞ！！お前らは貴族、貴族つって  
一生あいつらに媚を売る気か！？ああ！？」  
「「「……………」」」

「俺はごめんだ。お前らみたいに俺はあんな  
クズな奴らどもに媚を売るのなら死んだ方がまだ」

「ちっ！！胸糞悪いな。机粉碎しちゃったし」

集が片付けようとした時何人かの生徒が近づいてきた。  
「ん？」

「頑張つてね！！集君！！」

「応援してるから！！」

その目には先程の様な同情等は入っておらず純粹  
に応援すると言っていた。

「俺も応援するぜ？集」

「ゼロ」

「お前のお陰で目が覚めたよ。頑張れ！！」

「ああ、勿論だろ！！」

「すっげ〜。デカイな」

集がいる場所は決闘が行われる闘技場だったが  
その広さに驚いていた。

「まあな、ここは全生徒が入るし大会とかも  
ここで行われるんだぜ？」

「で？何でお前がここにいる？ゼロ」

「いや〜近くでお前の雄姿を見たくてさ」

「別に良いけど。誰だよ？そこに隠れてる奴！！」

「おやおや、バレてしまいましたか」

「いつからお気づきに？」

「魔力を僅かに感じた」

「ほう。魔力はほぼ、消していたんですがね  
まだまだという事ですか」

「ところで、お前誰だ？」

「し、知らねえのかよ！？集！この人は  
ランカーで第4位の人だぞ！？」

「ランカー？何だそれ？」

「知らねえのかよ！？ランカーって言うのは一年に一度行われる  
全学校対象で開かれる大会で上位十人の事だよ！！

それで、この人は第四位の

ライト・サンダーさんだよ！！会えるとかまじですげえ！！」  
ゼロは目を輝かせて言った。

「で？その四位さんが何の用ですか？」

「いえいえ、君に一目会いたかったんですよ」

「そうですか。もう良いですか？そろそろ時間何ですけど？」

「ええ、どうぞ。もう満足ですので」

そう言いライトは一瞬で消え去った。

「き、消えた」

「まあ、頑張れよ！！集！！」

「ああ」

「ふゝなかなか面白い人でしたね」

「で、どうだったのよ。ライト」

「おやおやこれは第五位のライカさんではないですか。  
いつみても美しいですね」

「それはどうも。で、聞いてんだけど？」

「そうですね、彼は勝つでしょうね。それも圧倒的に」

「へ〜珍しい。あんたが勝利宣言するなんて。今日は雷が降るかしら？」

「はっはっは！！それは無いですよ」

「そう。そろそろ始まるわね。見に行こうつと」

ライカは消え去ってどこかに行ってしまった。

「自分も行きますかね」

ライトも一瞬で消え去った。

会場はかなり熱狂していた。

「あ〜何で理事長も許しちゃうんですか？」

「はっはっはっは！！ま、私も興味があるのだよ」

「は〜集君、勝ちますかね？」

「さあな。ま、結果はすぐに付くと思うがな」

「何ですか？」

「直感だ」

「は〜」

「よく来たな。平民」

「俺は平民で言う名前じゃない。如月集だ！！」

「平民の名前を覚えると思うか？この俺が」

「覚えなくてほしいね。お前みたいな奴には」

「ま、また！！まあ、良い。ここで君は負けるのだから」

「あつそ。で、どうする？」

「何がだ？」

「ハンデだよ」

「はっはっはっはっは！！そうか、そうか。君は勝てないからハンデをくれというのか！？いい心がけだな」

「何を勘違いしてんだ？お前がするんじゃない。

ぼくがするんだよ」





「ふふふ、凄いな」  
ルーラが持つているコップが突然、黒い何かに吸い込まれ消えた。  
「ふふふ、本当にすごいな」あゝ  
一回で良いから食べてみたいな」  
その笑顔は黒く冷たいものだった。

「おおおお！！」

「おい、いつまで続けるつもりだ？」

「何！？」

「さっさとお前の魔法使えよ。負けるぞ？」

「いいだろう！！使ってやる」

ボルテックは一旦距離を取った。

「俺の魔法は雷！！」

「ネタバレすんなよ」

ボルテックは刀に雷を纏わせ体にも纏わせた。

「喰らえ！！」

「……」

一瞬、ボルテックが消え、集の後ろに現れた。

「雷の魔法で体に電気を纏わせ身体能力を一時的に上げて切る。

お前は切られた事にすら気づかず死ぬ」

剣を納めようとした時、いつもより剣が軽かった。

「ん？いつもより軽い？」

見てみると刀身が何かに折られたように折れていた。

「馬鹿な！！」

「確かに人間は電気で動いてるから、

雷で身体能力は上げられるか」

「き、貴様何をした！？」







第7話 戦いの始まり(後書き)

おはようございます。如何でしたか？  
感想もお待ちしております。  
それでは。

## 第8話 戦いの終わり、そして…

「理事長!!」

「あれは…まさか!!」

別室で見えていた理事長の顔が黒い何かを見た途端に驚愕に染まった。

「どうなさいますか!?!」

「すぐにランカーを闘技場に派遣しろ!!」

それと教員は生徒たちの避難誘導の準備を!!」

「は、はい!!」

フィーリは慌てて他の教員に連絡しに行った。

「まさか、奴が?」

会場は騒然としていた。

ボルテックが叫びをあげたかと思うと突然、

苦しみながら黒い何かを出し始めた。

「これは?」

集は目の前に出てきた黒い何かを睨んでいた。

黒い何かは炎の様に揺らめいていた。

すると、突然黒い何かがボルテックを包みこみだした。

「あれはやばい!!」

直感的にそう思った集はすぐさまボルテックを救出しに行くが黒い何かがそれをさせまいと攻撃してきた。

「うお!!何だあれは!?!」

黒い何かから飛ばされてきた物は

床についた瞬間、その部分の床が消滅した。

「な！き、消えた？それよりも、あいつだ！！」

集は攻撃を避けながら近づいて行くが遅かった。

黒い何かがいきなり拡散した。

「く！！」

「ぐうううう！！！！」

「ボルテック：じゃなさそうだな」

その姿は、獣のように唸りを上げ、目は真っ黒に変色しており体から黒い何かが煙のように揺らめいていた。

「ぐわあ！！」

「！！！！！！」

ボルテックが地面を強く蹴ると地面は抉れ衝撃波が集を壁に打ち付けた。

「があ！！痛ってえな！！」

集は視線を上げた瞬間には目の前に膝が迫っていた。

「くそ！！」

どうにかして首を曲げて避けると壁は砕かれ崩壊した。

「ひどんな膝してんだよ！？」

驚きながらも相手から眼を離すわけにはいかなかった。

「があ！！」

ボルテックが叫ぶと空が雲に覆われ、落雷が大量に落ちてきた。

「くそ！！」

集は先程やった方法を両手に使い、雷を腕に留まらせようとするがあまりに多いため体に電流が、全て流れ込んでしまった。

「ああああああああ！！！！！！」

「ぐがああああ！！！！！！」

それでも相手は止まらずにさらなる追撃をかけようとしてきた。

「目を覚ませ！！この野郎が！！」

集は顔面に拳を直撃させたがそれでも止まらずに逆に殴られ壁に衝突した。

「ぐうえー!!」

集の体からは既に大量の血が流れていた。

「まだ、皆が避難しきっていないから氷が使えない」

「ぐおおおおおおお!!」

相手はそれでもお構いなく動けない集に大量の落雷をぶつけてきた。

「ああああああああああ!!」

集はもろに落雷を受け床に倒れ伏せた。

その体は時折痙攣しており危険な状態だった。

「ぐううう」

動けなくなっと思ったボルテックは今度は

観客席に体を向けた。

「や…めろ」

「ぐううう」

ボルテックは聞かずに手に落雷をぶつけエネルギーを溜め始めた。

「や…めろって言ってるんだろ!!」

「があああああ!!」

「止めるー!!!」

雷が観客席に残っている生徒に放たれ大爆発を起こした。

<別室>

「な、何だあれは!？」

別室で見ていた彼らもその様子を見ていた。

「ルーラ!! あんた何か分かる!？」

ライカはルーラに疑問をぶつけた。

「分からない!! あんなのは見たことが無いよ!!」

「じゃ、一仕事といくか」

今まで寝ていたチエーンの少年が目を覚まし行動を開始しようとした。

「少しお待ちになってくれませんか？」

「ん？」

ライトが動こうとした少年に声をかけ動きを止めた。

「この件は彼に任せてみませんか？」

「どういう意味だ！？ライト！！」

「私は彼の實力が見たいのですよ。ゆえさん」

「何を言っている！？早く行かないと集が！！」

「彼は唯一の氷の魔法の持ち主です。私はそれがみたいのですよ」

「そんな事は知らん！！私は行く！！」

「おやおや、珍しいですね。貴方があの程度の人物を助けに行くとは。あの時とは大違いですね」

ライトがそう言った瞬間、ゆえは怒りを露わにして刀を抜き刀身に炎を纏わせライトに向かって行った。

「うるさい！！」

ライトも刀を抜き雷を刀身に纏わせ受け止めた。

「ちよ、ちよっと！！こんなところで戦う気！？

状況を考えなさいよ！！二人とも！！」

「ライカは黙ってる！！ライト、つくづく私は貴様のその考えが気に食わん」

「よく言われます。ですが見たくはありませんか？

氷の魔法の力を」

「お前の見たがっている氷、あいつ使ったぞ」

「おお！！」

ライトはそう言われ画面に食いつくように見た。

「ぐううう」

満足したのかボルテックだったものはさらなる標的を探そうと背を向け移動しようとしたが足が動かなかった。

「ぐう？」

不思議に思い足に目をやると足が凍っていた。

「はあ、はあ。もう良いや。皆はまだいるみたいだけど

逃げるのに必死だろ。お前を凍りづけにしてやる」

集は咄嗟に観客席の壁を凍らし巨大な氷壁作り雷から守っていた。

「ぐああああ！！！」

ボルテックだったものは集に向かっていき雷を纏わせた

パンチを撃つが集はそれを避けずに氷の壁を作り防御した。

「お前は俺を怒らした。覚悟しろ」

集はその壁に触れて、瞬時に氷壁を厚くしていき

壁に激突するまで凍らした。

「ぐえええええ！！！！」

壁に激突してもなおボルテックは氷を砕き

集に向かってきた。

「まだ、動くか。仕方無い。許せよ、ボルテック」

集はボルテックの体を徐々に凍らしていった。

「ぐつあああああ！！！」

「中にいるのは、誰かは知らないが、

ここで凍りづけになってもらう。

永遠にその中で眠ってる！！」

集はボルテックごと凍りづけにして行動停止状態にまでした。

「はあ、はあ、はあ。痛いな。終わったか」

「集————！！！！」

後ろからゆえの音が聞こえ振り向くと皆が見えていた。

「おゝい、皆〜!!」

集が皆に手を振った瞬間…

「集!! 後ろ!!」

「へ? うし」

ルーラに言われ後ろを向いた瞬間、集の体を黒い何か貫いた。

「が、あ」

良く見るとボルテックを凍りづけにした氷はいつのまにか砕けておりそこから黒い何かが集の体に伸びていた。

「集——————!!!!!!」

最後に聞こえたのはゆえの自分と呼ぶ叫び声だった。

第8話 戦いの終わり、そして…（後書き）

こんばんわ！！ケンです！！

如何でしたか！？

徐々にこの作品もアクセス数が増えて参りました。

これも皆さんのおかげです！！

ありがとうございます！！

感想もお待ちしておりますのでよろしくお願いいたします！！  
それでは！！



## 第9話 ギルドと蘇りし闇の王

「失礼します」

「どうぞ」

理事長室にはフィーリと理事長の二人だけがいた。

勿論、防音用の魔法までも施して。

「それでどうだった？」

「はい。如月君ですが命には別条はないそうです」

「そうか。もう片方は」

「残念ながら」

「そうか…死因は？」

「医師によると魔力が完全に体から無くなったことによるものだと思います」

「そうか…ありがとう。引き続き頼む」

「分かりました」

「今年は厄介なことになりそうだな」

理事長は苦虫を噛み潰した様な顔をした。

「ん〜ここは？」

集はうつすら目を開けると薬品のニオイがうつすらと感じられた。

「えっと、確か、戦ってて、それで何かに刺されて」

徐々に頭が冴えていき起き上がろうとすると

お腹辺りに重さを感じて起き上がれなかった。

「ん？何か乗ってる？」

視線をお腹に向けると見慣れた赤い服が見えた。

「ゆえ？」

「集？…起きたのか！？集！！」

「あ、ああ」

「大丈夫か！？どこか痛む所とかは！？」

「お、落ち着けて。別に痛むところもないし」

「そ、そうか良かった」

ゆえは安心したように胸を撫で下ろした。

「全く、倒したつもりで不意打ちを食らうとは。

まだまだ、鍛錬が足りんようだな」

「ああ、そうだな。それよりもあの黒いものは何だったんだ？」

「さあ、分かん。今、先生方が調査をしてくれているのだろう」

「ふん」

すると医務室のドアが思いっきり蹴破られた。

「大丈夫かしらー！！集！！」

「ライカ…うるさい…病人…響く」

「そうだよ。フォレスの言う通りだよ」

上からライカ、フォレス、ルーラである。

「皆！！」

「大丈夫？集？」

ルーラが心配そうに見つめた。

「ああ、もう大丈夫だよ。心配掛けてごめんね」

「うん。でも、良かった…私が食べる前に

死んでもらっては困るしね……」

「ごめん、最後の方よく聞こえなかった。もっかい言ってくれる？」

「いや、何でもないよ」

「そう、なら良いけど」

「にしても、あんた、よくあんな奴と闘えたわね」

ライカが不思議そうに質問した。

「うん、まあ、観客席の皆が、危なかったから無我夢中で」  
「かと言ってそれで命を落としたら元も子もないぞ」  
「分かってるよ。これからもよろしく頼むよ？ゆえ」  
「あ、ああ。任せろ！！」  
集の笑顔を見たゆえは少し顔を赤くして了承した。

知られることのない会話

とある場所にて10人ほどの人物が集まっていた。

「それではの方は？」

「ああ、まだ完全に復活なされるには足りないが順調に魔力を蓄えておられる」

するとドアが開かれ一人の男性が入って来た。

「……お帰りなさいませ！！マスターハデス！！！！」  
ハデスと呼ばれた男は手で全員を座らせ椅子に座った。

「皆、私を解放してくれた事に感謝する。」

我が封印されてから何年たった？」

「30年でございます！！」

「そうか…あ奴のせいで我は、魔力をほぼ失い封印された。だが、お主たちのお陰で再びこの世に復活できた。

まだ、魔力を取り戻すのに時間はかかる。

そこでお主たちに、当分は組織の、指揮権を与える。

その間は自由にしてくれて構わん」

「……は！！ありがたき幸せ！！！！」

「ふむ。この世を支配する為に！！」

その言葉をハデスが言った瞬間全員が跪いた。

<翌日>

医務室の先生から、学校に行っても良いと言われ集は翌日から学校に行った。

先生によると治りが早く傷が既に塞がったらしい。それでも、異常だと言われてしまった。

そんな事は気にせず

教室に入ると、一番にゼロに話しかけられた。

「集!!昨日、お前大丈夫だったか!？」

ゼロの大きな声で全員が心配そうにこちらを見た。

「ああ、大丈夫だよ!!だから、みんな心配しないで!!」

集が大声でそう言うと皆、安心したかのようにまた喋り始めた。

そして、チャイムが鳴り全員が席に着いた。

「はい、皆おはよう」

「「「おはようございます!!!!!!」」」

「今日の連絡は一つだけよ。もうじき、

学校生徒によるギルド任務が近づいてきているから

その班分けを6時間目にするから誰と組むか

相談しておいてね。それと如月君は昼休みに理事長室に行つて頂戴」

「分かりました」

「今日の連絡は終わり。皆、今日も一日頑張つてね」

フィーリが出て行くと同時に教科担当の先生が入って来た。

「はい、じゃあ授業を始める。」

知つての通りもうじきギルド任務が行われる。

そこで今日は魔物について詳しくやっていく。

教科書のp13を開けてくれ」

「魔物ね〜予想はしてたけど本当にいるとはね〜」  
集が考え事をしてしていると先生にあてられてしまった。

「じゃあ、如月。その5行目を読んでくれ」

「はい。魔物というのは我々、人間とは離れた場所に暮らしている生物の事を言う。魔物は種類が膨大に存在しており未だに発見されていない新種の魔物もいると言われている」

「はい、そこまでで、良いぞ。さっき読んでもらったとおり魔物は本当にたくさん存在している。有名なところで言うとゴブリン種やウルフ種、ドラゴン種や古龍種、他にも種類は存在している。ほとんどが人間を襲っているが中には人間と共存している種もいる。そこだけは、しっかりと頭に入れておいてくれ」  
それから先生の武勇伝や魔物から貰ったものなどほとんどが自慢話だったが説明していた。

キーンコーン、カーンコーン

「む。終わりか、まあ良い。この続きはまた次回だ」  
そう言い先生は教室から出て行った。

「あ〜疲れた」

「確かにさっきの話は疲れるな。ゼロ」

「ああ、ほとんど自慢話じゃねえか」

「本当かは別として面白かったがな」

「まあ、そうだけだよ」

「それよりも、ゼロ。ギルドって何だ？」

「おいおい、世間知らずにも程があるぞ」

「悪い」

「守護隊は知ってるよな？」

「ああ」

「あれは民間のとか言われてるが実際は  
国家からの推薦がないと入れないんだ」

「ふむふむ」

「でも、ギルドってのは推薦とか一切いらずに  
そこに登録するだけで依頼をする事が出来るんだ」

「その依頼ってどんなのがあるんだ？」

「依頼にもランクがあるんだ。最初、登録すると  
ランクDの物しか受けられないんだ。」

「ちなみにランクは最高がSSSで最低がDだ」

「そのランクってのはどう上げていくんだ？」

「そうだな。主に依頼の数をこなしていくかそのランクの中で  
最も難しい依頼を成功させたりしたら上がる。」

「ちなみにそのランクはこういうギルドカードだったので確認できる」

「ゼロはポケットから一枚のカードを」

「取り出すとそこには顔写真とランクが書かれてあった。」

「ちなみにD。」

「ふ〜ん。で、班はどうする？」

「一緒に組まないか？集」

「ん〜まあ、このクラスで一番仲が

「良いのはゼロだし組もうか」

「決まりだな。後はまあ6時間目で決めようぜ」

「了解」

その後、特に何もなく昼休みを迎えた。

「お〜い、集。昼飯一緒について先生に呼ばれてたっけ？」

「ああ、ごめん」

「いいよ、ほかの奴らと食べとくから」

「ああ、じゃあな」

集は教室を出て理事長室に向かった。

「失礼します」

「どうぞ」

中から理事長の声が聞こえたのでそのまま入っていった。

「やあやあ、集君。昼休み中にごめんね」

「いえ、別に。それで何でしょうか？」

「ふむ。君のギルドカードが出来たからね。それを渡そうとね」  
集はカードを受け取りながら質問した。

「それならファイリー先生から直接貰った方が早いのでは？」

「私が集君にここに来てもらったのは

それだけが理由じゃないんだ」

「え？そうなんですか？」

「ああ、君に一つ言いたい事があってね」

「それで話したい事って？」

「ああ、その前に」

理事長が指を鳴らすと周りの空間が一瞬だけずれ、また戻った。  
「理事長？」

「ああ、すまない。これは防音用の魔法でね。

あまり君以外には聞かれたくないんだ」

「は、はあ」

「まあ、座りたまえ」

集はすぐ近くにあった椅子を取り机をはさんで  
理事長の真正面に座った。

「それで言いたい事って？」

「ああ、この前の決闘の時、君が

戦った物があつたね？その事についてだ」

「！！！！！！」

集の体が一瞬、強張った。

「大丈夫だ。落ち着いてくれ」

「は、はい」

集の額から冷汗が流れた。

「あれの事だが、もしも、また会ってしまった場合はすぐさま逃げるんだ。何があっても」

「どうしてですか？」

「すまないが今はまだ、言えない。だが、これだけは言える。君では絶対に勝てない。そんな相手なんだ」

「……分かりました。出来るだけ逃げるようにします」

「ああ、そうしてくれ。言いたい事はそれだけだ」

「はい。失礼します」

理事長が魔法を解き集は部屋から出て行った。

「まだ、奴は完全には、復活していない。その間に私が封印しなければならんな。それが、母様の願いだ。ハデス……お前はその目で見えているんだ」

理事長室にぼつりと声が響いた。



第9話 ギルドと蘇りし闇の王（後書き）

こんばんわ！！ケンです！！

実はさつきまで今までの話を修正していました！！

どうも、主観的にしか見れないもんですから。

友達にかなり矛盾点を言われて修正しておりました。

如何でしたか？

感想もお待ちしております！！

それでは。

## 第10話 しっくり来る刀

「これはどうだ？集」

「ん〜」

集は今、ゆえと共に武器屋にいた。

何故、そんなところにいるかというところそれは朝にまで時間を遡る。

「ふああ〜おはよ、ゆえ」

「ああ、おはよ」

結局、鍛錬は曜日毎に行う事になり今日は、

学校が休みであり鍛錬も無い為、しっくり寝ようかとも、思ったが自然といつもの起きる時間に起きてしまった。

「ふああ〜眠い」

「だらしないぞ？集」

「そうは言っても眠いし」

「ならば、出かけないか？」

「ふえ？今日？」

「もちろんだ。ここら辺をまだ案内していなかったからな」

「ん〜いいや。今日は一日ダラダラ」

集が二度寝をする為、部屋に戻ろうとすると

ゆえに肩を女の子の握力とは思えないような握力で掴まれた。

「い、痛い！！痛いから、ゆえ！！」

「行くよな？集」

「…はい」

ゆえのオーラに怖気つき、さっさと従う事にした。

「ふむ。よろしい。ならば、さっそく準備だ！！」

「お、おう」

集は二度寝を諦め外出の準備をした。

という事で二人は初めて会った時に、立ち寄った市場にいた。休日ともあってか大勢の買い物客で賑わっていた。

「相変わらずここは、賑やかだな」

「そうだな。前も言ったと思うがここは

コラリスで最も規模が大きいと言われてる市場なんだ」

「ふ〜ん」

集は店を見ているとふと気がついた。

「そう言えばこの世界の通貨って何なんだ？」

「なあ、ゆえ」

「何だ？」

「この世界の通貨ってさ何なんだ？」

周りに聞こえないように小声で言った。

「そういえば、言ってなかったな。」

「この通貨はペルだ」

「ペル？」

「そう。10ミリペルは1ペルで

1メガペルが100ペルに相当し1ギガペルは1000ペルになるんだ」

「つまり最小単位はミリペルで最高単位はギガペルか？」

「ああ、そう思ってくれたらいい」

「で、どこに行くんだ？」

「ああ、もうじきギルド任務があるだろう？」

「ああ」

「その時に武器はあった方がいい。魔物は魔法だけで倒せるものばかりとは限らないからな」

「でも、武器って強制なのか？」

「いや、強制ではないが集はあまり、人前で

魔法は使えないだろう？その為だ」

「ああ、成程」

その後何分か歩き、武器屋が集まっている地域に着き  
ゆえと集はその内の一軒のお店に入った。

「いらつしゃい。おや？これはこれは、ゆえさんじゃないですか」

「お久しぶりです。店長」

この店はゆえが、今使っている刀を購入した  
店でお勧めらしい。

「今回はどのような用事で？」

「ああ、彼の武器を買おうかと

思ってるんだが見て回っても良いか？」

「ええ、どうぞ。ごゆっくり」

集とゆえは店内を見て行った。

「これなんか、どうだ？集」

ゆえが勧めてきた物は長めの剣だった。

「これは？」

「これは、魔法の伝達率が最高クラスなんだ」

「魔法の伝達率って？」

「伝達率というのは、その武器にどのくらい魔法を  
伝えやすいかという指標だ」

「つまり、魔法を纏わせるとい事？」

「まあ、そんな感じだ。武器だけで戦っても相手に傷は付けられるが  
それだけでは勝てないからな」

「ふん」

「どうだ？集」

一旦、持ってみたがすぐにゆえに返してしまった。

「んん何かしつくりこないんだよね」

「そうか…なら他を探してみるか」

「ん〜これもじっくりこないな〜」

「またか？もうこれで、この店の物は全部見て回ったぞ？」

「おやおや、どうやらじっくり来る物が無かったようですな  
後ろから店長が杖をつきながらこちらにやって来た。

よく見ると右足が義足だった。

「では、店の裏にある倉庫を、見てみては如何ですか？」

「良いんですか？店長」

「ええ、武器は一番じっくり来るものでないといけませんからね  
店長に案内され、集とゆえは店の裏にある倉庫に入った。

「へ〜いっぱいあるんですね」

「ええ、まあ。もしお気に召したものがあれば言って下さい」

「はい、ありがとうございます」

「ん〜中々無いね〜じっくり来る物が」

集は武器の山を漁っていると気になったものが見えた。

「ん？これは」

集は何かに惹かれるように武器の山に埋もれた刀を探していった。

「どうした？集」

「うん、ちょっと気になったものが

あつてね。抜けないな」

「手伝おう」

ゆえも手伝いながら武器の山を、退かしていくと一本の刀が出てきた。

「これか？集の探していたものは？」

「うん。それだよ」

その刀は長い間、放置されてきたのか、埃がかなりかぶっていた。

「じっくり来る物がありましたかな？」

「店長。この刀は？」

「あゝこれは確か何十年前も前に売られてきた物ですよ」

「ぜ、全部覚えてるんですか？」

集は驚いたように聞き返した。

「ええ。店の武器の事は全部覚えていますから。」

それにしても、よくこんな古い刀を見つけてきましたね」

「ええ、まあ」

「集、これ抜けないぞ」

ゆえは鞘から刀を抜こうとしていたが全く抜けなかった。

「そんな筈は」

店長も一緒に抜こうとしたが全く抜けなかった。

「貸してみてくれる？」

「ああ、いいがこの刀は止めた方が」

「抜けた！！」

「何だと！？」

よく見ると確かに刀は抜けていた。

「おおゝ何だかわからないけどどしっくり来る！！」

ゆえー！！僕はこれを買っぞー！！」

「べ、別に良いがいいのか本当に？」

ゆえが心配するのも無理はなかった。

なんせ、その刀は錆だらけで真っ黒だったのだ。

「僕はこれがいい！！」

「あ、ああ分かった。店長、おいくらですか？」

「いえ、お金はいりませんよ」

「え？でも」

「良いんですよ。もうすぐ、あの倉庫の武器は廃棄処分

するつもりでしたから。それに、刀も喜んでいます」

「そうですか…分かりました」

そのまま、二人は武器屋を後にして再び市場の散策に出かけた。  
「……貴方の言うとおりあの刀の所有者は見つかりましたよ」  
店長は二人を見ながら懐かしそうに呟いたがその声は  
誰にも聞こえない。

あれから、市場の散策を終えた二人は一旦  
家に帰った後、昼ごはんを食べ、  
学園の地下鍛錬場に行った。

「では、集。これから剣の鍛錬をするが良いか？」

「いいよ。今日は別にやることもないしね」

「分かった。まずは魔法を刀に乗せてみる。

こういう風に」

ゆえは刀を抜き、炎を刀に乗せた。

まるで、刀が燃えているように見えた。

「この原理は魔力を刀に流し込む感覚だ。やってみろ」

「分かった」

集も刀を抜きゆえの様にしようとしたが

「あり？」

「どうした？早くしないか」

「い、いやしてんだけど。むむ、この！！」

魔力を流してみたが何も変化は見られず、

集がありったけの魔力を乗せた途端、

刀の錆が光り始めた。

「何をしている！？集！！」

「わ、分かんねえよ！！」

二人が騒いでいるうちに錆が一気に吹き飛んだ。

「こ、これは」

「白い刀？」

錆だらけだった刀は先程とは変わり  
全てが白色に変わった。

「きれいだな」

「だが、そんなに白い刀は初めて見る」

集は試しに刀を振った。すると…

「うお!!!」

刀から氷の魔法が出て一気に辺りを凍らせた。

「な、なんて威力だ」

「ゆえ。模擬戦しようか」

「集？」

「闘ってみたいんだ。この刀と共に」

「…分かった」

ゆえは集の真剣な顔を見て刀を抜いた。

「だが、手加減はしないぞ」

「ああ、それで良い」

お互い刀を抜き向き合った。

「行くぞ!!!」

同時に動き出し、炎と氷がぶつかった。

「つ、疲れた」

「ああ、私もだ」

結局、あの模擬戦は引き分けとなり

その後に、刀の扱い方をゆえに教えてもらい

今日はそれまでにして家に帰る事にした。

そして、今は夕食も食べ終わり寝る時間だった。

「なあ、ゆえ」



「何だ？」

「明後日だったよな？ギルド任務って」

「ああ、そうだな」

「1組の奴らは全員、Dランクなのか？」

「いや、1組はC以上でない和在籍出来ないんだ」

「ふうん。ま、いいや。何やんのかな？」

「さあな、それは班で決める事だからな」

「そっか。楽しみだな」

「ああ」

「御休み。ゆえ」

「ああ、御休み」

鍛錬で疲れていたのか二人はそう、  
時間もかからずに眠りに落ちた。

第10話 しっくり来る刀（後書き）

こんばんわ！！ケンです！！

如何でしたか？

やはり、自分は文章で表現するのが下手ですね。

こんな作品をお気に入り登録、してくれた方には  
感謝です！！

感想もお待ちしておりますのでよろしければ、  
送ってきてください。

それでは

## 第11話 ギルド任務

「おっす!!おはよう!!集!!」

「ああ、おはよう。ゼロ」

「何だよ、今日はギルド任務だつてのにテンション低いぞ」

「これはいつも通りだよ。君が高いだけ」

「そうか、ま、いいや。行こうぜ!!」

もう、みんな来てるかもしれないしな」

「ああ」

結局、この前に決めた班は男子3人、女子2人の計5人となった。

「未だにクラスの奴らの名前と顔が一致してないのに、班員なんかもつと分からねえし」

教室に入るとそこには、既にほとんどの生徒が来ており

今日の行動の、確認や班員と楽しそうにしゃべっていたりすると、後ろから肩を叩かれた。

「ん？」

後ろを振り向くとそこには、小柄の女の子がいた。

「おはよう。如月君」

「おはよう…:ごめん、名前なんだっけ？」

「おいおい、班員の名前ぐらい覚えておけよな」

「仕方がないよ、ゼロ君。如月君は転校してきた

1か月も経っていないんだから。」

私の名前は、アミヤ・ユーリだよ。アミヤで良いよ」

「うん、分かった。よろしく」

「ところで、あいつらはまだ来てないのか？」

「うん、そうみたいだね」

「あいつらって?」

「私達の班の残りの3人だよ」

「たぶん、もうすぐ来るぜ。ほら、噂をすれば」

「おはよ、ゼロ」

「おう! 紹介するぜ、こいつらは俺の幼馴染の  
ロック・ランスと暴力女だ」

ゼロがいい終えたと同時にゼロの頭に  
カバンが全速力でぶつけられた。

「誰が、暴力女よ!! 私はアイリス・メリーって名前があんのよ!  
!」

「今まさにそれだが!!」

「何ですって!?!」

「おい、そこまでにしておけよ」

状況を見かねたロックが二人を止めに入った。

「「あ!?!」」

「二人がラブラブなのは結構だが夫婦喧嘩は  
余所ですてくれ」

「だ、誰がこんな奴とラブラブなのよ!!」

こんな奴と夫婦になるんだったらもつとカッコいい人と夫婦になる  
わよ!!」

そうは言いながらも顔を真っ赤にしながらゼロを横目でちらちらと  
見ながら、否定しているので、説得力がまるでない。

「それはこつちのセリフだ!! こんな奴と夫婦になるんなら  
もつと優しい子と夫婦になりたいね!!」

「何ですって!?!」

「何だよ!?!」

「お前ら状況、分かってんのか?」

「「は!?!」」

集に言われ、二人は周りを見渡してみるとクラスの全員が

こちらを見ていた。

「やっと、分かったか。さっさと今日の確認をするぞ」

「…はい」

「という事で今日のギルド任務だが、どこのギルドに行くんだ？ギルドは属性になぞられて作られており

例えば炎のギルド、サラマンダーという風に各地にいくつものギルドが設置されている。ちなみにどこか一つでも登録されていればどこのギルドでも任務を受ける事が出来る。

「やっぱり、ギルド最強って謳われているサラマンダーじゃない？」

「何言ってるんだよ！？やっぱり、ここは俺の魔法のアクアパラインだろう！？」

「お前こそ何を言ってる。ゼロ。ここは雷のライトニングだろう」

結局、再び3人の言い合いが始まった。

「は〜ロツクが大人びて見えたのは僕の勘違いか？」

「いや、集君は間違ってるよ」

結局、集が3人を落ち着かせ多数決を取ったところサラマンダーに決まった。

「やったー！！どうよ！！やっぱりサラマンダーじゃない！！」

「何でサラマンダーなんだ」

「同感だ、ゼロ」

「ほら、ゼロ君もロツク君ももう諦めなよ。

決まっちゃったんだから」

「アミヤの言う通りだ。しつこい男は女の子に嫌われるぞ？」



「良いじゃないのよ!!昔から来たかったギルドにようやく来れたんだから」

「アイリスはここに来たかったの?」

「うん!ねえ、アミヤは紅蓮の剣士って知ってる?」

「聞いた事はあるよ。確か、その人は刀一本と炎の魔法だけで

一人で古龍種も倒したことがあるって言う噂でしょ?」

「噂じゃないのよ!!あたし一度実際に見たことがあるのよ!!」

「また、その話かよ」

「うるさいわね」

「紅蓮の剣士か……まさかな」

集の頭の中には一瞬、ゆえが思い浮かんだがそれは無いと思わずぐにぬぐい去った。

ここから集達の任務が始まろうとしている。

第11話 ギルド任務（後書き）

こんばんわ!!!ケンです!!!  
如何でしたか？

中々、ユニークが増えない。

やはり難しいですね!!!

それでは!!!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7088y/>

---

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

2011年11月27日00時20分発行